

どうして災害時にボランティアが必要なのか?

大阪大学・(特)日本災害救援ボランティアネットワーク

渥美公秀

はじめに

地震、津波、さらには、放射線といった複合的、かつ、広域に甚大な被害を及ぼす災害となった東日本大震災では、災害ボランティアによる柔軟な対応が期待された。もちろん、各地で、充実した活動が展開されてきたのは事実である。しかし、災害ボランティア活動に対する硬直した対応も見られた。まず、初動が遅れた。次に、時期や地域によって、災害ボランティアが不足しているとか、逆に、多すぎるといった報道がなされた。

実は、こうした問題は、東日本大震災で初めて指摘されたことではない。むしろ、未曾有の災害を前にして、またもや従来と同じ問題が指摘されてしまった。

短絡的に過ぎるが、それほど課題の多い災害ボランティア活動であれば、いつそのこと、災害ボランティアなど不要ではいかという議論もあろう。実際、災害ボランティア不要論はある。災害救援は、そもそも国や自治体が責任を持って行うべきであり、災害ボランティアに依存してはならないのであって、災害ボランティアなど不要になるような社会を作るべきだというわけである。

しかし、今後も災害に見舞われることが確実な日本社会にとって、災害ボランティアは必要である。災害現場には、災害ボランティアだからこそできることがあるからである。しかも、災害ボランティアだからこそできることを日本社会の文脈に敷衍すれば、この閉塞感を打破しうる突破口さえ見えてくる。以下では、2つの例に絞って検討

し、そこから、災害ボランティアを含む社会を展望してみよう。

災害ボランティアだからこそできること

まず、災害ボランティアは、想定されていなかった事柄に気づき、創意工夫をもって対処できる可能性を持っている。ここで、支援が10項目にわたって想定されているとしよう。さらに、行政や企業で対応できることは8項目しかないとする。もちろん、行政や企業が対応できないからといって、何も災害ボランティアがその埋め合わせをする義務はない。しかし、それでは、支援から取り残される被災者が出てくる。そこで、さしあたって、災害ボランティアが残りの2項目を埋めることはできるだろう。こうして、災害ボランティアの力によって、支援が進む。ただ、これは第1段階である。

当然ながら、想定した支援で十分ということは、まずありえない。つまり、想定されていなかった11番目(12番目…)の支援項目が浮かび上がってくる。新しく追加された11番目の項目は、最初の10項目以外の無数の項目の中から、現場で選ばれるから、既存の制度では対応できない。そこで、災害ボランティアが必要となる。災害ボランティアは、臨機応変に、創意工夫をもって対応しうるからである。例えば、災害ボランティアが取り組む瓦礫処理や被災者の戸別訪問は、どちらも想定された支援の1つであろう。ただ、瓦礫処理をしていると写真が出てくる。戸別訪問をしていると写真がなくて悲しむ声に出会う。当初、瓦礫

から出てくる写真に関する支援は、想定されていなかった。すると、災害ボランティアは、写真を1枚1枚丁寧に洗浄し、分類し、展示して引き取ってもらうという活動を展開する。この活動は、災害ボランティアだからこそできる活動の1つである。

次に、災害ボランティアは、相手を特定せずに、贈与し続けられる可能性がある。ここで贈与とは、相手が欲するか否かを第一義とせず、物や時間や労力を端的に相手に手渡してしまうことである。通常は、特定の相手に対して行われる。また、贈与は、暗黙であれ、返礼を期待しているが、返礼さえも期待しない場合、これを純粋な贈与と呼ぶ。贈与と対を成すのは、交換である。交換には、何と何がなぜ交換できるのかということについて、予め相互の了解が成立していることが前提になる。それに対し、贈与は、そういった了解が予め成立していない。したがって、贈与を受けた相手にとって、それは常に思わぬプレゼントになる。

さて、当然ながら、災害ボランティアは、被災された人々であれば、分け隔てなく贈与を行う。しかも多くの場合、災害ボランティア活動は、純粋な贈与として現れる。例えば、被災者の話を聴くという傾聴活動がある。遠くから、話を聴きに来してくれる災害ボランティアは、話す側にとっては、思わぬできごとであろう。しかも、災害ボランティアは、聴くことを通して、時間や行為を相手に手渡すが、そこに返礼は求めない。さらに、話の相手は特定されない。この活動も、災害ボランティアだからこそできる活動の1つである。

災害ボランティアを含む社会

想定外の事態に対応し、不特定の人々に純粋な贈与を繰り返すという災害ボランティアの特徴は、現在の日本社会の趨勢と好対照を成している。通常、何らかの不具合が発生すると、想定外でしたとすまし顔で応えて、その後の対応は十分になされない。また、社会の主流は、当面、市場至上

主義である。そこでは、貨幣に代表される価値が偏重され、それを予め共有していることを前提に、特定の相手との間で交換が発生する。相手を特定しない思わぬ贈与、ましてや、返礼を求めない純粋贈与は希である。その結果、多くの人々が、閉塞感に満ちた殺伐とした社会に生きていて感じてしまう。そんな社会において、想定外に創意工夫を凝らし、不特定の人々に純粋贈与を繰り返す災害ボランティアという存在は、1つの光明に見えてこないだろうか。

もちろん、想定外の事柄への対処や不特定の人々への純粋な贈与は、何も災害ボランティアだけが行うのではない。むしろ、これらは、今日の日本社会が知ってはいるけれども忘れていたこと、あるいは、抑圧していたことでもある。災害ボランティアは、我々が抑圧してきたことを解放してくれる存在なのである。臨機応変に行動し、不特定の人々に贈与し続けることが浸透すれば、現状とは随分と異なる社会が見えてこよう。

一方、同じ問題を指摘され続けている災害ボランティアの側も、その解決に向けて、変化すべきであろう。問題の核心は、被災者支援二という目的に対する手段の1つであるはずの災害ボランティア活動が、目的化してしまったことである。それは、東日本大震災の初動時に、「災害ボランティアをするにはどうしたらいいですか?」といった問いを何度も投げかけられたことに現れている。この問いに、被災者という言葉は含まれていない。どこかに"良い"ボランティア像を想定しているような問いでもある。東日本大震災という未曾有の事態を前にしている今こそ、災害ボランティア活動は、被災者救援という目的のための手段に過ぎないという原点に戻りたい。そうすれば、災害ボランティアは、臨機応変に対応し不特定の人々に贈与し続ける力を回復し、今後の日本社会にとって、不可欠な存在として認知されていくはずである。災害ボランティアに関わる者の一人として、そこに希望を見たいと思う。